

地域住民との協働による自然環境との関係を伝える遺跡の活用手法に関する研究

：平沢官衙遺跡における実践を通じて

協園大史

【背景・目的】

つくば市平沢地区に位置する平沢官衙遺跡は、筑波山地域ジオパークのジオサイト「平沢・宝筐山」に位置する奈良平安時代の役所跡である。筑波山を後背とする立地や、発掘された礎石に一带から産出する片麻岩が用いられるなど、筑波山地域の地形地質や自然環境と密接な関係をもつ。一方、これまで遺跡と周辺環境との関係を示すような活用手法の検討は不足しており、来訪者や住民がその関係性を十分に理解しているとはいえなかった。また、現在の平沢官衙では復元建物の老朽化に伴う再整備が進められており、これに併せて遺跡の将来的な活用手法の検討が求められた。ジオパークのボトムアップの理念に基づくならば、この検討過程では地域住民による主体的な活動が前提となる。本研究では、再整備中の平沢官衙遺跡を対象に、遺跡と周辺環境との関係を示す活用手法を、地域住民と協働しながら検討するための仕組みの構築を目的とした。研究方法は、住民参加型ワークショップの開催およびその効果の検証とした。

【結果】

本研究では、住民参加型ワークショップを全2回実施した。両ワークショップでは、遺跡内にアクリル板を設置し、それを通して遺跡と筑波山をはじめとする周辺環境との関係を示すことのできる活用手法を検討した。第1回目のワークショップでは、作業方法の改善や参加者へ事前に提供すべき遺跡に関する情報について、参加した住民から意見が寄せられた。

これらの意見を受けて、第2回目のワークショップでは、平沢官衙遺跡の往時の様相を想像しながらアクリル板上に復元することをテーマとした。建物の部材や人物、遺物等のシールを用意し、それらをアクリル板上に貼り付け、また、そこに地質や植生に関する情報を書き込むことで、往時の様相を復元できるようにした（写真1）。参加者からは、「地質や植生といった要素と遺跡とのつながりへの理解が深まった」、「モノや人まで含めて遺跡を想像できるようになった」、「異なる関心を有する人同士での交流ができた」、といった意見が寄せられた。



(写真1) ワークショップ成果品

【考察】

本研究で提案した、平沢官衙遺跡における地質的要素・自然的要素・歴史文化的要素の一体的な関係性を示す活用手法は、遺跡への多角的な視座をもたらし、その理解を深めることに寄与した。将来像が完全に定まっていない再整備の過程において、地域住民をはじめ多様な主体が協働して活用手法を検討したことで、今後の遺跡利用イメージの共有に貢献した。本研究をきっかけとして、住民をはじめとする多様な主体による多角的な視座からの議論が継続されることが、遺跡の持続性につながると考えた。

キーワード：平沢官衙遺跡、遺跡の整備・活用、住民参加型ワークショップ